平成26年秋季ビーチクリーニング

小田島厚 (東船大N15)

気象庁の長期予報では、当日は雨模様だったが、 予報に反してその日は、小寒いくらいの爽やかな 小春日和ともいえる好天となり、最高の条件の下、 9月21日(日)、平成26年度秋季鵠沼海岸クリー ンアップが挙行された。連休の谷間であったこと もあって、参加人数に多少寂しさを感じたが、増 加傾向にある子供、外国人を含め、前回より多い 約二百数十名で実施された。

現在、ビーチクリーアップ活動は、我々の所属するJEANと全国美化協会との協賛で開催されていて、企業としては、今や企業独自のCSR活動のため、当イベントから脱退したが、以前会員だった某ビバァリッジ会社、某水産会社からは、CSR活動とは別に個人的にかなりの人数が参加している。したがって、この2社と海洋会との3グループが主軸となっている。

JEANが発足して今年で丁度25年目。このところ、ビーチクリーニングが多少停滞気味となっているようだが、JEANとして活動戦略を強化することが当面の課題であろう。幸い政府も近

年、海洋の生物保存や環境問題に力を入れ始め、 国際海ごみサミットの日本開催等、多くの人材を 投入する計画である。「海の森作りの会」が各方 面から高い評価を浴び、賞賛されていることも政 府を誘導した一因であろう。皆さまもごみ拾いで はなく、サミットの方に参加されたらいかがでし ょうか。

近年、異常気象による大災害が全国各地で多発しており、ボランティアで奉仕活動に参加する人が増えている。このような赫々たる行為には、賞揚を惜しまない。が、大災害の発生時のみ奉仕するのがボランティアであると思い込んでいる節がある。現在少子高齢化が深刻な問題になっており、今後、さらに増進することは自明である。ボランティア活動は、高齢者の介護、子供を預ける託児所の要員確保、あるいは動物・鳥獣類・海中生物の保護、河川の美化等々、広域にわたって存在している。これらに対するボランティアの現状は、どうだろうか。我が国では、これらが商業化されてしまい、ボランティアとしての社会的市民権は



参加者総員

得られていない。我が国の歴史的背景からして、 商業化は当然といえば当然である。官・民とも仕 事を消化ぎりぎりまで抱え、「無報酬のボランティ アなんか考える暇はない」というのが我が国の社 会通念である。

一方、真のボランティア思考とは、インターン制度とか OJT(On the Job Training) 制度を基に、この期間無報酬でいろんな分野での技術を実体験し、また習得し、これらの技術を生かして就職先を探したり、就職後の貴重なノウハウにするのが本来のボランティアである。

その結果として、会社・社会に貢献するものである。このシステムの方が合理的であることには間違いはない。が、しかし、しかしである。我が国の古来からの終身雇用制度が未だに根強く居座っている現在、当該制度を急に浸透させることは極めて難しいことである。しかし、近い将来、この制度を取り入れ、インターンとして多くの若

者のパワーをボランティアとして活躍してもらうことは、各分野での人手不足が解消され、極めて有意義なこととなるはずである。即刻、この合理的な開かれた社会に転換することを切に望む次第である。

話が本題から逸脱したが、我々はボランティア の真の実態とは何たるかをもっと追究する必要が あるのではないだろうか。

今回の鵠沼海岸ビーチクリーンアップに東京海洋大学の学生が 3 名参加してくれた。クリーンアップが終わってから、学生 3 名と昼食を共にし、いろんな分野での話や上記真のボランティアの話に関して、老若間で意見交換をしたが、学生も大いに共鳴してくれ、もっと長い時間の意見交流をとリクエストされたので、OK サインで解散。我々もボランティアの一端を担ったな、という満足感とランチで満腹となった。



参加者(敬称略)

戸苅 清 北沢 昌永 早津 義彦 高橋 正夫 眞那子金三 林 作治 角田 昌男 杉山 茂(学生) 佐々木涼平(学生) 石原 健嗣(学生) 小田島 厚